



# コンピュータアートの祭典 アルスエレクトロニカ フェスティバル・レポート

9月8日から13日まで、オーストリアのリンツ市で恒例の「アルスエレクトロニカフェスティバル」(以下「AEF」, 本誌10月号「ネットワークアート最前線」参照)が開催された。これはコンピュータやネットワークを使ったアート作品の国際展で、優れた作品には賞が贈られる。

フェスティバルの目玉ともいえるアルスエレクトロニカ大賞では、インタラクティブアート部門で岩井俊雄 + 坂本龍一の「Music Plays Images x Images Play Music」が、ネット部門ではセンソリウムチームの「Sensorium」(www.sensorium.org)が金賞を受賞。4部門のうち、2部門を日本勢が占める結果となった。

コンピュータアートの祭典としてはシーグラフやイセアと並んで有名なAEFだが、その実態はどのようなものか。センソリウムチームのディレクターの1人である小崎氏に滞在日記を綴ってもらった。

文：小崎哲哉  
Text: Tetsuya OZAKI

写真：菊地薫  
Photos: Kaoru KIKUCHI



オープニングイベント「ボディビルダー」。サウンドに合わせてアルスエレクトロニカセンターの外壁に映像が投影された。(写真提供：アルスエレクトロニカセンター。以下AEC)



ステラークのパフォーマンス「パラサイト」。

注1) アルスエレクトロニカセンター (http://www.aec.at/) : オーストリアのリンツにあるメディアアート専門の美術館。毎年ここを中心会場としてアルスエレクトロニカフェスティバルが行われる。

## 9月8日 月 ライブで幕を開けた フェスティバル初日

カメラマンの菊地さんは北イタリアのマジョーレ湖畔に住んでいる。ミラノで彼と落ち合い、陸路リンツへ向かった。アルプスを越え、ザルツブルクの湖沼地帯を横目で見ながら夕方7時過ぎに到着。F1取材の専門家でもある菊地さんは「リンツまで? 900キロ弱だから、ま、6~7時間でしょ」と言っていたが、本当に7時間弱で走り抜けるとは思わなかった……。

初秋に近いとはいえヨーロッパの夏は日が長く、ドナウ川の水面は陽光を受けてきらきらと光っていた。オーストリア重工業の中心地と聞いていたけれど、思いのほかきれいな街だ。

アルスエレクトロニカセンター(注1。以下「AEC」)はドナウ河畔にある市庁舎

の真向かい、つまり、リンツ市でも屈指の一等地に位置している。市の入れ込みようが想像されるロケーションだが、市庁舎との間の目抜き通りは歩行者天国になっていて大勢の人が歩いていた。市庁舎の前庭ではオープニングライブ「ボディビルダー」が始まっている。通りには5か所に大型スクリーンが設置され、その様子が映し出されていた。

予定より1時間半オシで午後10時半からAECで「パラサイト」を観る。これはオーストリアのベテランアーティスト、ステラークによるマルチメディアパフォーマンスで、全裸に近い体に各種のセンサーを装着し、映像と音楽をリアルタイムに生成するというもの。フェスティバルのテーマ「フレッシュファクター(肉体的要素)」に合わせたのだろうが、もう少し自分のフレッシュファクターを鍛えたほうがいいのではと思った(笑)。

終演後、遅い夕食をとって午前1時半過ぎにラマダ・ホテルにチェックイン。

9月9日 火

## 坂本氏 & 岩井氏の ライブは大盛況

午前8時起床。別のホテルにいるセンソリウム(注2)のスタッフに電話をする。全体を統括するマネージングディレクターの西村佳哲さんは、とっくに外出したのが、一晩中帰っていないのか、ともあれ不在。ウェブホッパーなどを担当したディレクターの江渡浩一郎さんの部屋についてもらおうと、寝入りばなだったのが「ふい〜」という死にそうな声。インスタレーションのための実働部隊は1週間ほど前から現地に入っているが、おそらくほとんど寝ていないに違いない。

メインの展示会場の1つデザインセンターはラマダ・ホテルと隣り合っている。体育館のように広い2階建ての建物に入ると、いましました。入り口の右奥で、西村さん、ネットサウンド担当ディレクターの東工大・大野浩之助教授、全体のアートディレクション担当の東泉一郎さんが工作の時間よろしく作業をしている。

「本当はもうできてなきゃいけないんだけど」と東泉さん。ネットワークのトラフィックを可聴化したネットサウンドは、同じくトラフィックを可視化したウェブホッパーとともに、審査員のみならず多くの参加アーティストから絶賛を受けたという。寝不足のためだろう、みんな眼が赤かった。

地階から2階までをひととおり見たあと、AECに行き、プレス向きガイドツアー

に参加する。常設作品も出展作品も娯楽性に富んだレベルの高いものが多く、デジタルハイテクノロジーを駆使しているわりに、展示自体にはアナログ的ともいような雰囲気漂っている。要するに手作り感。パリにある科学産業博物館

「ラ・ヴィレット」の威圧的な冷たさではなく、サンフランシスコのチルドレンミュージアム「エクスプロラトリウム」のなごみ系温かさでも言ったらいいだろうか。

午後8時。市の東部にある劇場「Posthof」に岩井俊雄×坂本龍一の「Music Plays Images × Images Play Music」を観に(聴きに?)行く。入場券はプラチナチケットと化し、600人収容の劇場は超満員だった。

インターネットユーザーに演奏に参加してもらった「リモートピアノ」(注3)はレーターがダウンしたためにうまくいかなかった。だが、それ以外は大成功。教授のピアノが奏でる音が流星のような、あるいは幾何学的な模様映像となってスクリーンを飛び交うごとに、また、岩井氏が即興で作るパターンが教授のフレーズに影響を与える度に、観客=聴衆は「オー」という歓声をあげ、終演後には万雷の拍手がしばし鳴りやまなかった。

コンサート終了後、ラマダ・ホテルでセブションパーティー。藤幡正樹氏、ジェフリー・ショー氏、クリスチャン・メラ氏らの顔も見える。



メイン会場となったアルスエレクトロニカセンター(上)とデザインセンター。



URL <http://www.sensorium.org>

注2) センソリウム: 昨年インターネット上で行われていた「インターネット1996ワールドエキスポジョン」の日本テーマ館のウェブサイト。

注3) リモート・ピアノ: ウェブ上で特定のキーを叩くと、ライブ会場にあるピアノがそれに連動して演奏する仕組み。



「センソリウム」スタッフによるインスタレーション。好評だったウェブホッパー(上)とネットサウンド(下)。



坂本氏 & 岩井氏の「Music Plays Images × Images Play Music」。昨年水戸芸術館で行われた公演とほぼ同じプログラムだった。今年12月に日本でも公演される予定(AEC)。

9月10日 水

## アルスエレクトロニカ 大賞授賞式

今回は電子メールのチェックに少々悩まされた。

モジュラージャックのアダプターを持っていったのだが、部屋からは直接コネクできず、ホテル内のビジネスセンターを使わなければならない。欧米にアクセスポイントが多いという理由でIBMネットに加入していったのだが、たくさんの人が利用するので当然混んでいる。アーティストなどフェスティバル招待者はAECのアカウントをもらっているからいいけれど、そうでないときというのはちょっと困る。やや苦戦したあげく、なんとか速報をインターネットマガジンに送稿する。

午後、デザインセンターでAEFのアーティストディレクター、ゲルフリート・シュトッカー氏に、ラマダ・ホテルで坂本教授に、それぞれインタビュー。2人とも「ネットの重要性が高まるにつれ、フェスティバルを特定の場所で開くことの意味は相対的に薄れていく」と指摘する。今日

の電子アートフェスティバルがはらむ逆説的にして根源的な矛盾。

午後9時。オーストリア国営放送(ORF)のスタジオで、アルスエレクトロニカ大賞授賞式。インタラクティブアート、ネット以外の2部門は、コンピュータアニメーションがスコット・スクワイアーズ、コンピュータミュージックがマット・ヘックカートと、米国人2人が金賞を受賞した。受賞作品のプレゼンテーションを見て思ったのはジャンル間の垣根が低くなり、どんどん融合しているということ。これも、電子アートが持つ逆説的・根源的矛盾の1つだ。

センソリウムの竹村真一プロデューサーが「我々は新しいページをつくったのではない。ネットワークが生きていることを示すために、既存のリソースや技術を組み合わせ、インターネット自体をコンテンツ化したのだ」と、なかなかいいスピーチをする。



ラマダ・ホテルの部屋にあったモジュラージャック。国ごとに形が違うからめんどうだ。



オーストリア国営放送スタジオ内での授賞式風景。ORFはフェスティバルの主催者でもある。



金賞受賞者。写真左より竹村真一氏、岩井俊雄氏、スコット・スクワイアーズ氏、マット・ヘックカート氏。

## コンピュータアートの祭典 アルスエレクトロニカ フェスティバル・レポート



9月11日 木

## 参加アーティストによる フォーラムも充実

竹村プロデューサーにインタビューしたあと、インタラクティブアート部門のフォーラムを観にORFのスタジオへ行く。

岩井氏が「Music Plays ~」の発想の源について、映像や具体的なものを用いて非常に分かりやすいレクチャーを行う。いつもながら、岩井氏の英語は、その作品に似て論理的で、筋道がたどりやすく、曖昧なところがない。こういう言葉こそが真に国際的なのだと思う。「一昨日の復讐(リベンジ)です」と言いつつ行った「リモート・ピアノ」もこの日は無事成功!

フォーラムには米国人アーティストのポール・ギャリン氏も参加していた。センサーを備えた監視カメラと有刺鉄線、モニターとで構成されたインタラクティブ作品「ボーダー・パトロール」は、さまざまな理由で展示されなかった。今回のAEFにはアクチュアルな問題意識を持った作品が

少ないだけに残念なことだ。ちなみにギャリン氏は認定団体のNSIによるドメインネーム登録の独占的状態に反対していて、名刺を渡しておいたら帰国後さっそくこの問題に関するメッセージが送られてきた。

夜はデザインセンターのホールでダムタイプの「OR」を見た。会場の床がフラットで後部座席から舞台面が見えないという致命的欠点があり、やや気の毒だった。



日本から参加したアートユニット、ダムタイプの作品「OR」。



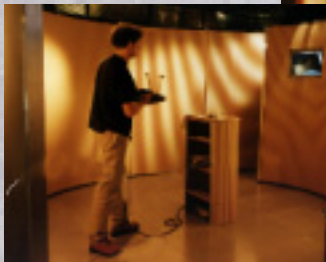
フォーラムでセンソリウムのプレゼンをしている竹村氏(左)と西村氏。



ポストベットでお馴染みの八谷和彦氏も参加。今回は「見ることは信じること」でインタラクティブアート部門の賞を受賞した。



ラファエル・ロサノ＝ヘンメルの「ディスプレイスト・エンペラース」(AEC)。



Art+Comの作品「The Invisible Shape of Things Past」(AEC)。



コンピュータミュージック部門で金賞を受賞したマット・ヘッカートの「マシン・サウンド」(AEC)。



9月12日 金

## リンツ城で見た「ディスプレイスト・エンペラース」

朝10時からORFのスタジオでネット部門のフォーラム。

センソリウムチームのプレゼンテーションは当初映像が出なくてははらしたが、最終的にはうまく運んだ。原因はプロジェクターの結線が外れていたというおまヌケなもの。プレゼン後のディスカッションでは、ORFスタジオアート&サイエンス部門のチーフで、シュトッカー氏と並んでAEFのアーティストックディレクターでもあ

るクリスチーネ・ショップ氏の言葉が印象的だった。昨年も同じことを述べたそうだが、曰く「私たちはアーティストたちにネットをメディアとして用いるよう奨励しているのです」。

センソリウムチームのメンバーの個別インタビューを行ったあと、AECでベルリンから来たArt+Comの2人と少し話をする。2メートル近くありそうな長身の2人に「Do you play basketball?」と冗談を言うと、「No, we play keyboards.」とお茶目に切り返された。

夜はマット・ヘッカートのコンサート「マシン・サウンド」を途中で抜け出し(ノイズ系ってあんまり得意じゃないんす......)「見ることは信じること」を出展している八谷和彦さんや西村さんたちと一緒にリンツ城に「ディスプレイスト・エンペラース」を観に行く。メキシコ系カナダ人アーティストのラファエル・ロサノ＝ヘンメルが中心となってつくった作品で、表現・意図ともに壮大な構想のインタラクティブアートだ。建築系出身の西村さんもしきりに感心する。「フェスティバルを特定の場所で開くことの意味」を問うたことのような作品は珍しい。

9月13日 土

## 街ぐるみで盛り上がったフェスティバル

最終日は雨。プレスオフィスに別れの挨拶に行き、展示撤収中のラファエルたちにリンツ城で短いインタビューをしてから遅い昼食をとってリンツの街をあとにする。

フェスティバルを通じて感じられたのは、AECスタッフに限らず、地元リンツの人々の熱意と明るさだった。人口22万という街の規模がちょうどいいのかもしれない。自らアーティストであるシュトッカー氏の人柄も大きいようだ。ともあれ、街をあげてフェスティバルを作り、慈しみ、楽しんでいる様子が伝わってくる。

「特定の場所で開くことの意味」は薄れていくかもしれないが、もう一度来たいと思った。ライブの感動、実際に触れることのできる作品、生身の人間との出会い……。バーチャル空間では味わえないリアルな喜びが、たしかにそこにはあったのだから。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)